サービスラーニングを振り返って

社会福祉学部社会福祉学科２年　大塚　由比子
活動先：NPO 法人　ひだまり
ゼミ：野尻　紀恵　先生

私はサービスラーニングで、認知症に対する考え方が大きく変わった。今回の活動で初めて認知症の方と関わらせていただき、それまで自分がイメージしていたものとは違うことに気付いた。私の勝手なイメージでは、認知症は不潔行動、暴力・暴言、徘徊など、とても極端なものばかりだった。確かにそれらは認知症の行動の一つではあるのだが、皆がみんなそういった行動や症状があるわけではなく、今回の活動先のひだまりでは、認知度の高い方にも、そういった行動は見られなかった。ただやはり、同じことを何回も言ったり、事実とは違うことを話したり、ということは幾度か見られた。認知症の方との会話のポイントやコツを職員さんに教わりながら、コミュニケーションの取り方もとても勉強になった。

今回訪れた特定非営利活動法人ひだまりは高齢者通所介護施設で、「人は要介護になっても住み慣れた家で、地域で、まちで、自分らしく輝き続けたいと願っています。そんな人々の願いに寄り添いながら少人数で家族的な雰囲気のデイサービスをはじめとする各種活動を通じて地域活動・生活支援を行います。」という理念のもと活動している。施設も古い民家を使用しており非常にアットホームな雰囲気であった。活動初日は緊張もあり、なかなかコミュニケーションを上手に取ることができず、また、聴覚障害のためコミュニケーション方法が主に手話だという方もいて、戸惑うことがあった。

サービスラーニングの活動最終日に、学生企画として、買い物とフルーツポンチ作りをした。午前中に行った買い物企画では百円ショップへ行き、利用者さんが自分の足で歩き、物を選び、お金を払って“買い物をする”という、利用者さんにとっては非日常的な動作ができたのではないかと思う。嬉しかったのが、買い物に行く直前まで「行きたくない」と言っていた利用者さん（普段、施設ではあまり歩くことはない方）が、いざ行ってみると誰よりも元気に歩いて、楽しそうにしていたことである。他の利用者さん方も、「お菓子を孫に買っていくんだ」、「〇〇（商品名）はど

こに置いてあるだろうか」などと言いながら買い物をしており、帰りの車内で買い物の感想を尋ねると、「楽しかった、また行きたい」という声を聴くことができた。

午後からはもう一方の企画、フルーツポンチ作りを行った。利用者さんには、フルーツの入った缶詰を缶切りで開けることと、フルーツを包丁で切ることをお願いした。こちらも買い物同様、みなさんテキパキと進んでこなしてくださり、缶切りなど手慣れた様子であった。フルーツポンチに使用するゼリーが十分に固まらないというハプニングはあったが、出来上がったものを口にし、「とても美味しい」とみなさんおっしゃっていた。企画を行うにあたって、本当にたくさんのスタッフさんが関わってくださり、買い物企画の下見にも２度連れて行っていただき、自分たちだけでは決して気付くことのできない細やかなアドバイスをしてくださった。また、再三言われたのは、「どれだけ準備や企画を念入りにしてもハプニングはつきもの」ということである。大切なのは、ハプニングが起きた時にどのように動くか、だという。学生企画では、考えが及ばず反省させられるところも多々あったが、その分学べることがたくさんあった。

今回、“サービスラーニング”という形で活動させていただいたものの、当初はサービスラーニングというもの自体よく分からず、正直あまりやる気も十分ではなかった。「なんだか抽象的な活動だなぁ」と思っていて、学生企画も適当に考えればいいかという程度に思っていた。しかしいざ活動が始まってみるとすごく楽しくて、日々勉強になり、「利用者さんの名前を早く覚えたい！」「もっと上手にコミュニケーションをとりたい！」「企画をよりよいものにする為にはどうすればいいんだろう...」などと考えている自分がいて、６日間なんて本当にあっという間に終わってしまった。

ひだまりさんで活動させていただいて感じたのは、利用者さんが施設でそれぞれ自分らしく居られる環境にあることや、常に利用者さん第一であること、スタッフさんの声掛け一つで利用者さんの動きが見違えるように違うこと...。活動していくなかで、スタッフさんとの情報共有の大切さを知ることと、未熟ではあるが学生で企画運営する力が身についたと思う。

活動当初はさっぱりだったサービスラーニングの意義も、完全ではないが見えてきたし、知多半島に数多くあるNPO団体のつながりも知り、感じることができた。サービスラーニングを通して学び得たもの、感じたことを忘れずに、今後の活動に活かしていきたい。